

あのとき何が起こっていたのか？(子育て世代の経験から)／展示の紹介.....(司会 濱岡豊)【13:00-14:15】

はじめに 濱岡豊(慶應義塾大学教授、原子力市民委員会)
あのとき何が起こっていたのか？(子育て世代の経験から) 佐原真紀(元ふくしま 30 年プロジェクト、福島市議会議員)
Q&A・ディスカッション
写真展「福島」の記憶 3.11 で止まった町 飛田晋秀(写真家)
原発災害情報センターの活動紹介 菅野行雄(NPO 原発災害情報センター理事長)
<休憩 15 分>

あのとき何が起こっていたのか？(ヨウ素剤が配布された三春から).....(司会 後藤忍)【14:30-16:15】

趣旨説明
三春町での企画の全体像 武藤類子(ひだんれん代表、原子力市民委員会)
両親の、R-DAN による測定を遠隔支援して 佐久間淳子
経験の継承 大河原さき(ひだんれん事務局長、モニタリングポストの継続配置を求める会・三春共同代表)
まとめ 後藤忍(福島大学教授、原子力市民委員会)
Q&A・ディスカッション
<休憩 15 分>

放射能に汚染された水や土壌をどうすればよいのか？.....(司会 八巻俊憲)【16:30-18:15】

汚染水処理を巡る意思決定の問題 濱岡豊(慶應義塾大学教授、原子力市民委員会)
ALPS 処理汚染水放出の状況について 満田夏花(国際環境 NGO FoE Japan 事務局長)
汚染土壌再利用と IAEA 報告書の問題点 和田央子(放射能ゴミ焼却を考えるふくしま連絡会)★
汚染土再利用における土壌粉じん吸入の危険性 青木一政(ちくりん舎／フクロウの会)
Q&A・ディスカッション

報告会場【プログラム】 11 月 4 日(月・祝)

福島での甲状腺がんをどう考えるのか？.....(司会 藤岡毅)【10:00-12:20】

全体像 濱岡豊(慶應義塾大学教授、原子力市民委員会)
県民健康調査の問題点 種市靖行(医師)
原発事故と甲状腺がんの因果関係(環境疫学の基本) 津田敏秀(岡山大学名誉教授、医師・医学博士) ★
福島原発事故の線量評価について～UNSCEAR 報告書による被ばく推定値の問題点と低線量被ばくの問題点
／ 本行忠志(大阪大学名誉教授、大阪大学大学院医学系研究科招へい教授、医師) ★
UNSCEAR 福島報告書における推定被ばく量の過小評価について 黒川眞一(高エネルギー加速器研究機構名誉教授)
Q&A・ディスカッション

<昼休憩>

あのとき何が起きていたのか？(何も知らされなかった津島から) (司会 八巻俊憲)【13:20-14:15】

「ふるさとを返せ 津島を原発訴訟」経緯と思い
Q&A・ディスカッション

石井ひろみ(福島原発事故津島被害者原告団副団長)

<休憩 10 分>

若者から見た福島原発事故(避難の問題を中心に) (司会 濱岡豊)【14:25-15:30】

原発事故による避難を体験して

明智礼華(原発賠償京都訴訟団、原子力市民委員会)

金本 暁(九州訴訟共同代表)★

「私」にとっての福島原発事故を表現すること
Q&A・ディスカッション

佐久川恵美(同志社大学都市研究センター研究員)★

<休憩 10 分>

ICRP の福島原発事故の捉え方や勧告策定のどこに問題があるのか？ (司会 柿原泰)【15:40-17:40】

ICRP 勧告の問題点——実際の視点から 柿原泰(東京海洋大学教授、市民科学研究室・低線量被曝研究会)

ICRP パブリックコメントの問題点

林衛(科学ジャーナリスト・富山大学准教授)★

安全性の考え方:市民のエンパワメントのために

八巻俊憲(原子力市民委員会)

市民主導の放射線防護:提言の概要

藤岡毅(大阪経済法科大学客員教授)

関連諸団体への要望

瀬川嘉之(高木学校、市民科学研究室・低線量被曝研究会)★

Q&A・ディスカッション

全体まとめと今後に向けて 【17:40-17:45】

後藤忍(福島大学教授、原子力市民委員会)

展示会場 11月3日(日)13時から11月4日(月・祝)16:30頃まで

- ・飛田晋秀「(写真展)福島記憶 3.11で止まった町」
- ・福島大学共生システム理工学類環境計画研究室「減思力(げんしりよく)」の教訓を学ぶためのパネル展
- ・三春町の皆さん「あの日風しもの町で起きたこと」パネル展
- ・NPO 原発災害情報センター「活動の紹介」

濱岡豊（慶應義塾大学教授、原子力市民委員会部会員）

学術博士。大学院修士課程では原子力工学を学ぶが、その後、データ分析を重視するマーケティング・サイエンス分野に転向、大学ではマーケティング・リサーチなどを教える。福島原発事故後は、放射線影響に関するデータの再分析なども行っている。著書に『講演録：福島第一原発事故と市民の健康——放射線疫学を読み解くためのデータ分析入門』（原子力市民委員会、2021年）などがある。

佐原真紀（元ふくしま 30 年プロジェクト、福島市議会議員）

福島市出身。2011 年 10 月に市民による放射能測定所を仲間と共に立ち上げ、2013 年に NPO 法人「ふくしま 30 年プロジェクト」を設立（2024 年 4 月解散）。2019 年の福島市議会議員選挙に立候補し、当選、現在に至る。

飛田晋秀（写真家）

福島県田村郡三春出身・在住。元々は職人さんの撮影を専門とするプロ・カメラマン。3.11 後、「事故を風化させない」「事故後の状況をありのままに知ってほしい」「福島県民の思いを知ってほしい」との思いから、福島第 1 原発事故の被災地を幾度となく訪れて撮影。日本全国で写真展を開催、2019 年には写真集「福島の記憶 3.11 で止まった町」（旬報社）を出版。

菅野行雄（NPO 原発災害情報センター理事長）

福島県白河市在住。原発災害情報センターは 2014 年設立。2022 年より NPO 法人。
<https://genpatusaigai.com/>

後藤忍（福島大学教授、原子力市民委員会部会長）

工学博士。福島大学教授。専門は、環境計画、環境システム工学、ランドスケープ計画。福島原発事故の直後、福島大学原発災害支援フォーラム（FGF）を結成。また、福島大学放射線副読本研究会での研究成果を『みんなで学ぶ放射線副読本——科学的・倫理的態度と論理を理解する』（合同出版、2013 年）として出版。論文に「教育と広報における人権侵害」「原発ゼロ社会への道——「無責任と不可視の構造」をこえて公正で開かれた社会へ」（共著、原子力市民委員会、2022 年）など。

武藤類子（原発事故被害者団体連絡会（ひだんれん）代表、原子力市民委員会委員）

福島県三春町在住。元養護学校教員。チェルノブイリ原発事故をきっかけとして脱原発運動に参加し、1988 年に福島で「脱原発福島ネットワーク」を結成した。2003 年に里山喫茶「燦（きらら）」を営むが、原発事故後に閉店。2011 年は「ハイロアクション福島原発 40 年」として活動を予定していた。2012 年に福島原発告訴団団長となる。著作に『10 年後の福島からあなたへ』（大月書店、2021 年）など。

佐久間淳子

三春町生まれ 東京在住。長年、自然の権利運動にかかわり、アーカイブス作成に尽力。共著に『環境倫理学』。2011 年 3 月 11 日以降、福島県三春町に設置した放射線検知器 R-DAN の測定値を軸に、メディアが報じない原発事故の影響を調査している。

大河原さき（ひだんれん事務局長、モニタリングポストの継続配置を求める会・三春共同代表）

三春町在住。2015 年、原発事故被害者団体連絡会立ち上げに関わり事務局を担当。モニタリングポストの継続配置を求める市民の会、これ以上海を汚すな！市民会議など、県内の複数の運動に関わり現在に至る。

満田夏花（国際環境 NGO FoE Japan 事務局長）

一般財団法人地球・人間環境フォーラム主任研究員を経て、2009 年から FoE Japan に参加。3.11 東日本大震災以降は、原発事故被害者の支援や脱原発・持続可能なエネルギー政策の実現に向けた各種活動に従事。

和田央子（放射能ゴミ焼却を考えるふくしま連絡会）

東京に生まれ育ち、2001 年福島県鮫川村に移住。2004 年隣の塙町に転居。2012 年自宅の近隣に秘密裏に計画された環境省の放射能汚染ゴミの焼却実験炉への反対運動を皮切りに、バイオマス発電、放射能汚染土、イノベーション・コースト構想の問題に取り組む。

青木一政（ちくりん舎／フクロウの会）

1952 年神奈川県生まれ。化学・フィルムメーカーのプラント計測制御技術者として勤務する傍ら、核廃棄物と被ばく問題に関心をもち反原発運動に従事。1989 年「福島老朽原発を考える会（フクロウの会）」発足時からの会員。福島原発事故発生直後、同会にて放射能測定プロジェクトを立ち上げ、市民の被ばく最小化のための取り組みに専念。2012 年、ゲルマニウム半導体検出器を備えた NPO 法人市民放射能監視センター（ちくりん舎）設立。住民の尿検査による内部被ばく実態調査、放射能ごみ焼却・汚染土再利用の問題に取り組む。論文「福島原発事故による南相馬市の住民の尿中放射性セシウム濃度測定による内部被ばく調査」（第 22 回環境放射能研究会）、口頭発表「南相馬住民の尿検査による内部被曝調査と土壌粉塵吸入による影響」（第 25 回「環境放射能」研究会）。

藤岡毅（大阪経済法科大学客員教授）

大阪大学基礎工学部卒。同大学院博士前期/後期（生物物理・分子生物学）終了後、民間企業勤務。40 代半ばで科学史に転身（博士・比較文化）。現在の関心は、科学と政治の関係の考察、特に政治的・イデオロギー的立場が放射線被ばくの健康影響の科学的評価に及ぼす影響の研究。著書に『核と放射線の現代史』（共著、昭和堂、2021）他、論文に「放射能汚染地域への帰還政策はいかに決定されたか」「科学史研究」（2017）、「低線量被ばく問題とアグノトロジー」（『21 世紀研究』（2019）などがある。

種市靖行（医師）

震災時には郡山市で整形外科診療所を開業していたが、翌年に診療所を閉院し妻を移住させた。その後、須賀川市の池田記念病院で整形外科診療を行いつつ、甲状腺超音波検査者資格を取得し、子供達を中心として甲状腺検査を開始。

津田敏秀（岡山大学名誉教授、医師・医学博士）

岡山大学医学部卒業後、内科勤務。岡山大学医学部衛生学教室にて医学博士取得。研究分野は疫学、環境医学、因果推

論など。2016 年、Epidemiology 誌に、福島県甲状腺検査で検出された甲状腺がんの数十倍の多発は事故によるもので、スクリーニングの結果ではないとする論文を発表。著書『医学者は公害事件で何をしてきたのか』岩波現代文庫など。

本行忠志(大阪大学名誉教授、大阪大学大学院医学系研究科招へい教授、医師)

専門は放射線生物学、環境影響評価など。1990 年代から、低線量放射線の人へのリスクに関する研究などに取り組む。チェルノブイリ放射能汚染による健康影響は研究テーマの一つであり、福島原発後は同地における被ばくによる健康影響について研究している。著書に『甲状腺がん多発 被ばく原因はもはや隠せない—UNSCEAR2020 レポート批判』(共著、耕文社、2022 年)などがある。

黒川眞一(高エネルギー加速器研究機構名誉教授)

理学博士。専門は加速器物理学。2011 年にヨーロッパ物理学会より Rolf Wideroe 賞、2012 年に中華人民共和國科学院国際科技合作受受賞。市民、科学者とともに宮崎早野論文の検証を行う他、UNSCEAR 福島報告書におけるシミュレーション結果についても批判的検討を行っている。論文に「被曝防護には空間線量そのものを使うことが妥当である——信頼性なく被曝線量を過小評価する宮崎早野第 1 論文」(岩波「科学」, 2019 年)など。

八巻俊憲(元福島県立田村高校理科教員、原子力市民委員会会員)

学術博士。福島県郡山市出身。東北大学工学部で応用物理学を学び、卒業後、定年まで福島県立高校の教員を勤める。2011 年の福島原発事故以後、諸学会・国際会議等で、福島住民の視点から問題提起。著作に「原子力を考える」川村康文編『STS 教育読本—市民のための科学的リテラシーの育成をめざして』(共著、かもがわ出版、2003 年)など。

石井ひろみ(福島原発事故津島被害者原告団副団長)

原発事故から10年経とうとしてもなお、これまで暮らしていたふるさととは、放射能によって汚染され、人の温もりを失い、あの日から奪われたままです。全域が帰還困難区域に指定され、これまで放置され続けてきた津島地区の半数を超える住民が、自ら弁護団の結成を要請し、「ふるさとを返せ！」と声を上げて立ち上がりました。

明智礼華(原発賠償京都訴訟団、原子力市民委員会)

未成年の時に地元の福島県で東日本大震災と原発事故、避難を体験。歴史学修士。京都府立大学大学院文学研究科史学専攻・博士後期課程。原発賠償京都訴訟原告のひとり。論文に「文化遺産と放射能大災害の関わり:福島第一原子力発電所事故による文化遺産の救出の状況」(京都橘大学大学院研究論集、2018 年)など。

金本 暁(九州訴訟共同代表)

いわき市出身。原発事故当時は中学生。九州へ避難。西南学院大学修士課程修了。第 49 回国連人権理事会本会議で、福島原発事故の被害についてスピーチをした。

佐久川恵美(同志社大学都市研究センター研究員)

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士後期

課程修了。専門分野は民俗学/生活史。沖縄出身、京都在住時に福島原発事故が生じ、原発の問題などに興味をもち、大学院では福島県在住者や避難者への聞き取りを続けてきた。論文に「語りきれない福島原発事故を問い続ける:声を通して記憶を分有する」(同志社グローバル・スタディーズ、2020 年)などがある。

柿原泰(東京海洋大学教授、市民科学研究室・低線量被曝研究会)

専門分野は科学技術史、科学社会学。放射線被曝の歴史、放射線影響に関する調査研究体制や放射線防護基準についての科学史的研究に取り組んでいる。著書に『よくわかる現代科学技術史・STS』(共編著、ミネルヴァ書房)、論文に「原爆影響調査から福島県民健康管理調査へ——放射線被曝の歴史の観点から」(『科学史研究』272)、「ABCC と原子爆弾影響研究所」(『生物学史研究』95)、「ネオリベラル・テクノロジー批判」(『現代思想』29(2))などがある。

林衛(科学ジャーナリスト・富山大学准教授)

岩波書店勤務・雑誌『科学』編集者、フリーランス編集者・ジャーナリスト、東大教養学部教養教育開発機構特任助教授などを経て現職。研究分野は科学コミュニケーション、科学技術社会論(STS)など。福島原発震災、公害被害放置問題に関する論考として「低線量被曝問題はなぜ混乱が続くのか—復興をさまたげる政府の放射線安全論」(市民研通信)、「中学校「理科」で震源モデルを学びたい—大川小児童の思いを語り継ぐためにも」(地震学会モノグラフ)、「水俣病国賠訴訟で全原告の症状認定」(週刊金曜日)などがある。

瀬川嘉之(高木学校、市民科学研究室・低線量被曝研究会)

市民科学者として、医療被曝、低線量被曝などの問題について研究、啓発などを行う。著書『福島原発事故はなぜ起きたか』(共著、藤原書店、2011 年)、『レントゲン、CT 検査 医療被ばくのリスク』(共著、ちくま文庫、2014 年)など。